

アレントの著作に関連する、西洋の歴史・哲学史を鮮やかに描出

人間の生き残りは、「世界を愛する」ということにかかっているのか
矢野久美子



中山元 著

▶ ハンナ・アレント〈世界への愛〉

その思想と生涯

10・25判 A 5判520頁 本体5700円

新曜社

ハイネカーは若きアレントに、アウクスティヌスの「アモール、ウォロ・ウト・シス」というラテン語の言葉を示し、「わたしがあなを愛するとは、あなたが愛すること、あなたがまませ、わたしは欲する、ということだ」と書き送った。しかしおそろしくその「愛は、他者としての『あなたそのもの』ではなく、あるべきほんらいの存在へと向けられたものだ」とアレントは晩年、その言葉を「わたしは愛する、すなわちあなたが存在するように意志する」という、他者にたいする最大の肯定へと言ひ換え、あなたに存在してほしい、と。彼女はさらにそれを「世界への愛」と結びつけた。一九六〇年代半ばの重要な講義のなかで、次のように語っている。「その物、その人に対するわたしは肯定は、いずれにしても存在するその物や人とわたしを結びつけます。わたしの否定は、その物や人からわたしを遠ざけます。この意味では世界は、〈世界への愛〉なのです。ところで世界への愛は、世界をわたしのために作りだし、わたしを世界のうちにはめ込むのです」

急において生まれる喜びを、アレント、そして本書の著者は、人間にとっけかけがえのないものとして提示した。ところでアレントのいう「世界」とは何か。著者の言葉によれば、人の一生を超越する歴史性をもつ共通世界であり、事物や環境や政治組織にみられる持続的世界であり、他者とともに作る世界、すなわち他者の前に現われ、他者もまた現われる公的な領域である。アレントはその生涯において、こうした他者との持続的に共生する「世界」の崩壊に直面しつつ、それを現代の社会においても作り出すことを願ったのだ。本書は「世界への愛」を軸に、『人間の条件』、『革命について』、『全体主義の起原』、ユダヤ論などのアレントの著作に関連する、西洋の歴史および西洋の哲学史を、鮮やかに描き出していくのである。

アレントが思索の背景としてつてもつ哲学的知識や歴史的背景は圧倒的なものであり、それゆえに彼女の著作を理解するのは決して容易ではない。本書はその難題を克服すべく、読者をアレントの思想が生まれたコンテクストへと引きなう。古代ギリシア、ローマ共和国キリスト教世界、近代社会、国民国家、全体主義、反ユダヤ主義、人種主義

といった、アレントの思想を理解するうえで重要な歴史が丁寧に語られ、その叙述そのものの面白さに随所で惹き込まれた。また、ソクラテス、プラトン、アウクスティヌス、トマス・アクィナス、マキアヴェッリ、ホッブズ、マルクス、ルソーなどの哲学的的確に解説され、アレントの思想の特徴が浮き彫りにされる。さらには、もう一つの柱として、ユダヤ女性としてのアレントの生涯にわたる闘いと、彼女が求めた公的な領域とその現代的要請が論じられる。そして、本書の鍵概念である「世界への愛」こそは、ハイネカーの思考からアレントを分かちつものだということが、説得的に示されるのである。ハイネカーは、技術による地球支配の破壊的傾向を破っており、アレントはその技術批判を継承した。しかし、彼女は同時に、「意思の動きを否定して『思考』の営みに閉じこもり、「運命」として受け入れるべき『存在の歴史』を提起するハイネカーからは、決定的に離脱したのだ。本書は二〇一二年三月一日の早朝に書き始められたという。「大津波と福島原子力発電所の崩壊の恐怖の光景」と「その後の無念の思い」は「文面に出していないと思う」と著者は書いているが、ア

レートの思想と生涯を論じるための思想と生涯を論じるための大著の行間から、未曾有の出来事に直面したわたしたちが考えるべき事柄が伝わってくる。逆に言えば、ここまで徹底して学び、考えなければならぬのだと思った。人間の生き残りは、「世界を愛する」ということにかかっているかもしれない。「孤立の生はあまりに厳し」。アレント、あるいは著者によれば、「世界への愛」の実践は抽象的なものではなく、日常の生活から始まるものである。「現われの空間は、人々が言論と活動の様式をもって共生しているところでは必ず生まれる」、「国はわれわれみんなが集まってわれわれの運命を決定するには大きすぎるから、そのなかにいくつかの公的な空間が必要なのだ」という、だからアレントは、「主権の原理」とは無縁なヴァン・ミーティングや、「垂直的ではなく水平的に」構成される権力の意義を強調していた。著者は、「自律的な空間を形成することは、既存の国家と社会の内部でも可能なことであると述べ、「世界への愛は、このような方式によってこそ、初めて現実の力を発揮する」とがでる」と書いている。簡単に読める本ではないが、アレント研究の必読書である。(フェリス学院大学教授)

とを意味する。その意志は行義、反ユダヤ主義、人種主義